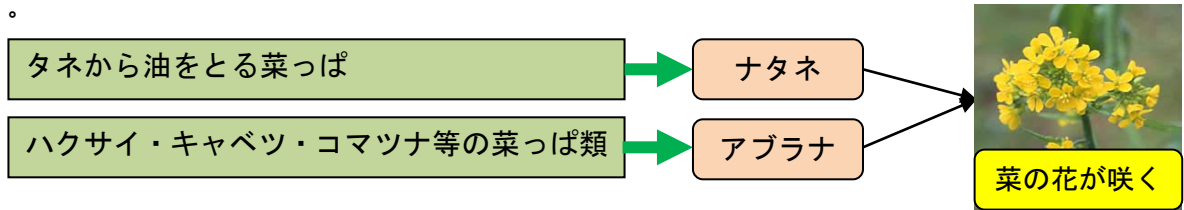


「菜の花」と「ナタネ」のちがい

「菜の花」は4枚の花弁が十字形に配列した黄色い花をつけるアブラナ科の菜っぱの花のことです。ハクサイ、コマツナ、ノザワナ、カラシナ、キャベツ等の花は全て「菜の花」です。

一方、「ナタネ(菜種)」はタネから油をとる菜っぱのことで、アブラナ(油菜)と区分して使われます。



川辺に咲く菜の花は野生のカラシナ、権現堂堤等の様な観賞用の菜の花は景観用の緑肥の一種です。

「菜の花」のタネはすべて「ナタネ」油となるか

石油ランプや電灯がなかった時代では、ナタネの油はあかり(灯)の燃料として重宝されていました。ドイツでディーゼルの燃料にも使われますが、現在では、日本ではサラダ油やマヨネーズ・マーガリン等の原料に食用油として使うのが一般的です。ナタネ油には元来エルシン酸という成分が含まれ、多量にとると健康上の問題があるとされているため、食用油に無エルシン酸のナタネ品種が改良されて来ました。「ナナシキブ」「キザキノナタネ」はその代表品種です。

一方、河原に咲く菜の花のタネや観賞用の菜の花のタネでは油量が少なく、成分の保証もないので、ナタネ油としての資格はありません。当教室のナタネは滋賀県の推奨品種である「ナナシキブ」のタネを直接入手して栽培しています。(滋賀県種苗生産販売協同組合)

ナタネからどのくらいの油がとれるか

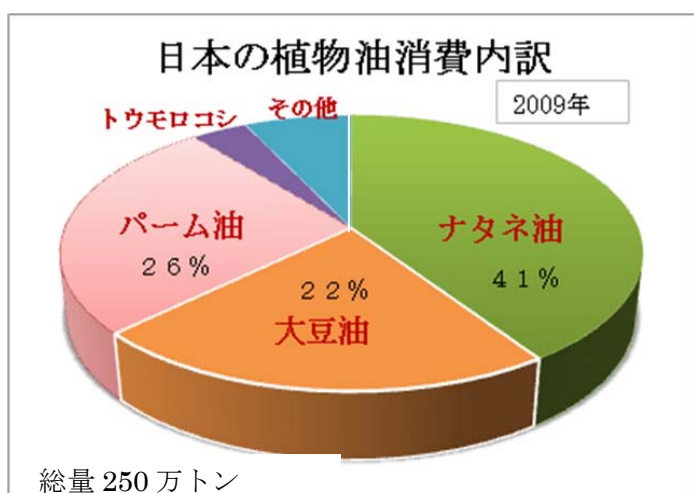
ナタネのタネに含まれる油は重さで約40%分です。工場の圧搾式搾油機にかけてその約80%をしぼることができます。約60%の残り分が油粕等となります。100kgのナタネで33kg、容量にして33リットルの油がとれる勘定です。小型の搾油機では60~70%をしぼることができます。

ナタネ油はどのくらい使われているか

ナタネや大豆等植物からとる油を植物油と云います。

日本では年間おおよそ250万トンの植物油が使われているそうです。ナタネ油、パーム油、大豆油が主力で、ナタネ油は100万トンで全体の40%を占めています。パーム油はアブラヤシの油でマレーシアから製品として輸入しています。

(出典 (社)日本植物油協会)

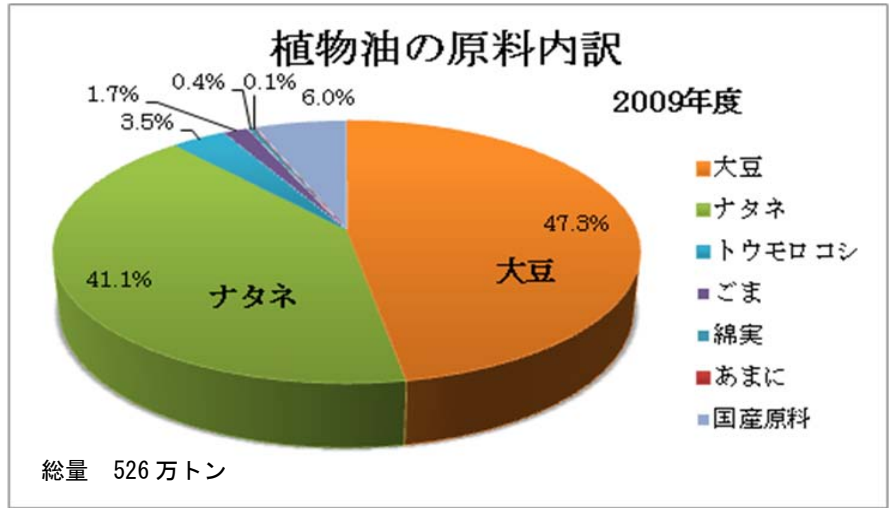


国内で製油されるナタネの量は

国内で製油される植物油の原料は、2009年度の原料総量は526万トンで、うち国産原料は31万トンで大半が米ぬかです。

ナタネは41%の200万トン以上を原料として使っています。国産ナタネは千トン以下で、殆ど輸入に頼っています。なお、パーム油は製品を輸入していますのでここには出て来ません。

(出典 (社)日本植物油協会)



ナタネはどこから輸入しているか

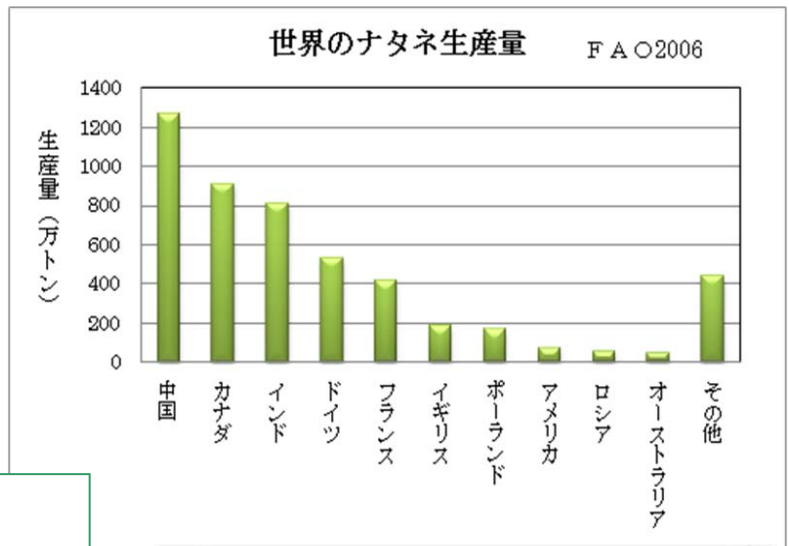
2009年度では、カナダから約200万トン、オーストラリアから約12万トンを入力しています。日本の農政の転換でナタネの生産が衰退し、カナダにナタネ供給の要請をした経緯があります。

(出典 (社)日本植物油協会)

世界のナタネ生産国はどこか

中国、カナダ、インドが上位を占めています。ドイツ、フランスのヨーロッパ先進国に生産量が多いのはディーゼルエンジンの燃料用です。

(出典 (社)日本植物油協会)



日本のナタネ生産は

1957年に最高の29万トンの生産量となった後、穀物の貿易自由化とともに減少の一途となり、北海道、青森、滋賀、鹿児島等で細々とした生産に留まり、統計として把握されていませんが、900トン程度と推測されます。

北海道：滝川地区

青森：下北半島横浜町



ナタネの全国栽培面積、生産量、10a当たりの生産量推移